





# 17 音の たより

22  
黛まどか



まゆずみ・まどか

俳人。2002年『京都の恋』で第2回山本健吉文学賞受賞。近著に『引き算の美学』（毎日新聞社）、句集『てっぺんの星』（本阿弥書店）、編著『まんかいのさくらがみれてうれしいな～被災地からの一句』（バジリコ）など。

音楽の殿堂、ニューヨーク・カーネギーホールに、福島県のおかあさんたちの歌声が響いた。  
一昨年の春、私が作詞した福島  
島の応援歌「そして、春〜福島  
から世界へ〜」（千住明氏作曲）の  
初演が、合唱団「友」によりニュ  
ヨークで行われた。「友」の指揮

者・白田正樹さんが後に福島県  
おかあさん合唱祭に足を運ばれ、  
「この歌は福島の人々が世界に向け  
て歌ってこそより意味がある」と、  
カーネギーでのコンサートを企  
画してくださったのだ。  
福島は歌枕の地で、松尾芭蕉  
も「おくのほそ道」の旅で句を

詠んでいる。また飯館村では俳  
句募集や「日本再発見塾」を催  
したことがあり、福島県は私に  
とって縁の深い特別な地である。  
口ずさむと眼裏に四季折々の山  
河が甦り、離散している人々の  
心が一つになるような歌にした  
い。また震災以後、福島すなわ  
ち放射線に汚染された地という  
イメージが蔓延しているが、福  
島本来の豊かさ、美しさを世界  
中の人に知ってほしいという願  
いを歌に込めた。

「おかあさんが元気であれば子  
どもたちもお年寄りも町も村も、  
きつと希望がわき、元気になる  
はず。そう信じて震災後も懸命  
に歌い続けてきた」と福島県お  
かあさん合唱連盟の三宅会長は  
おっしゃる。総勢140名。中に  
は南相馬市や飯館村など、いま  
だ避難生活を送られている方も  
いた。地元の民謡「会津磐梯山」  
や四季折々の童謡が披露される  
中、「そして、春」も歌われた。歌  
詞の余白に言葉にならない思い  
が詰まっていた。それは言葉の  
壁を越えてアメリカ人の心にも  
響いたように見えた。大ホール  
をほぼ一杯に埋めた聴衆が最後  
は総立ちで拍手をおくり、おかあ  
さんたちを、そして福島を称えた。

歌ふとは祈りにも似て星月夜

イラスト Ben

※「日本再発見塾」は黛まどかさんが呼びかけ人代表を務める活動です。